

## 1 2 【かめれおんまん】

町から、二枚目の青年がきたときのこと。

村から町に行く者はけっこういるが、町からくるとはめずらしい。

めずらしいのは、それだけではありません。

この青年は、みかけるたびに、ちがう色のかっこうをしている。

昨日は、上から下まで黄色ずくめ。

あざやかな黄色だから、うんこの色とはちがう。

今日は、全身真っ赤っか。

牛そっくりの体だから、まるで赤べこ。

明日は、きっと緑色で、森の中に入ったら見分けがつかないだろう。

村の若者は、みんな茶色とか灰色とかの服だから、すごく目立つ。

村の若い女たちが、嬌声（きょうせい）をあげてさわいでいる。

なるほど、これからはこれだな、これでないともてないのだな。

ぼくは感心し、その青年とともにだちになりたかったのです。

そばに近寄ると、舌をだす。

るる

る

るるる

る

それが、かわいいというか、おそろしいというか。

ぼくにとっては、おそろしいもかわいいの内だから、何とかともだちになりたい。

けれども懐爺が、邪魔（じゃま）をしました。

「金ちゃん、あれは【かめれおんまん】ですよ。千変万化（せんぺんばんか）のおばけですよ。といっても色だけですがね」

「おばけかい」

ぼくはおどろきでした。

青年は、何も害を加えていない。

「【かめれおんまん】は存在（そんざい）そのものが害なのです。ああして、若い女の気をひいてだますのです」

「かいじいの、やきもちじゃろ」

そうぼくがいてみると、  
「僕はやきもちなんかやいたことはありません」  
懐爺は、むきになりました。  
ぼくは、話をかえることにしました。  
「【かめれおんまん】のまんたあ、なんじゃ」  
「まんは、英語でおとことという意味です」  
「そんなら【かめれおんおとこ】としたほうがいいのう」  
「なんとかおとこ、というおぼけは多いですから。たまには、まんもよろしいでしょう」  
懐爺のいうことは、何となくいいかげんでした。  
それでもあの青年には、〈おとこ〉よりも〈まん〉が似あう。  
「【かめれおんまん】を、たいじするんか」  
懐爺は、なやんだ顔になりました。  
「退治しないと【こうもりおとこ】に変身（へんしん）しますからね」  
「【こうもりおとこ】たあ、なんじゃ」  
どうして【こうもりまん】じゃないのか、わからない。  
「【かめれおんまん】なら退治しなくとも、いずれ自滅（じめつ）するでしょうが、【こうもりおとこ】に変身すると、こんどは男に害をあたえま  
すからね」  
「【こうもりおとこ】も、そんざいそのものが、がいなのかい」  
存在そのもの、なんて意味は、とうぜんわからない。  
「説明がむずかしいですよ」  
懐爺はいいました。  
むずかしいというより、面倒臭いという顔でした。  
「へんしん、するのかのう」  
そこが問題だ、とおもわれたのです。  
「変身の可能性は、三割です」  
「そんなら、ほっとけばええじゃろ」  
「でもその三割が当たれば、十割というわけですから」  
「いみがわからん」  
三割が十割になる意味がわかれば天才。  
だいたい三割打者はいても、十割打者なんかいない。

「とにかく様子を見ましょう」

懐爺はやはり、面倒臭いという顔でした。

それでも懐爺の判断は、正しかったのです。

村の若い女たちは、【かめれおんまん】にすぐにあきて、【かめれおんまん】は町に帰りました。

【こうもりおとこ】に変身する、持ち時間もなかったらしい。